

# 奨励品種候補 水稻うるち「彩のきずな」の品種特性

埼玉県農林総合研究センター水田農業研究所

## 1 品種の概要

### (1) 来歴

「彩のきずな」は、中生(なかくて)・病虫害複合抵抗性・極良食味品種を育種目標として、平成15年に「愛知108号」(後の「ゆめまつり」)を母親、「埼455」を父親として人工交配を行った組合せから育成された中生の水稻うるち種である。平成24年11月8日に品種登録出願公表された。

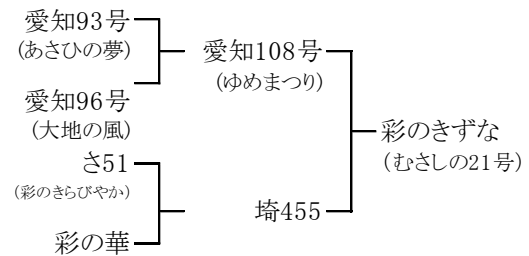


図1 系譜図

### (2) 品種の特性

「キヌヒカリ」に比べて

- ◆ 出穂期は2～3日早い。成熟期は同じ～2日遅く、登熟日数が長い。
- ◆ 稈長は10cm短く、穂長は2cm長く、穂数は2～3本/株多い(15%多い)。
- ◆ 一穂粒数は少なく(70～90粒)、粒着が「疎」である。
- ◆ 稈が細く、耐倒伏性は「やや強」である。
- ◆ 千粒重が2g重く、収量は5～10%多収である。
- ◆ 食味は同等以上で、アミロースがやや低く、タンパク質は同等～やや高い。
- ◆ 高温登熟性は「やや強～強」、高温下でも品質低下が軽減できる。
- ◆ 玄米粒色の飴色が淡い。
- ◆ 籾の褐変症状が少なく、熟色は鮮やか。
- ◆ 障害型耐冷性が「やや弱～弱」で、冷害に弱い。

### (3) 栽培上の留意点

- ◆ 耐冷性が弱いため4月中の移植は行わない。幼穂形成期、減数分裂期に低温が予測される場合は深水管理を徹底する。
- ◆ 高温登熟性は優れるが、登熟期の栄養不足は白未熟粒の発生を助長するので、適正な施肥管理に努める。
- ◆ 熟期が早い、短稈穂数型等、紋枯病の被害が拡大しやすい特性のため、防除を行う。

## 2 県内の普及の考え方

「キヌヒカリ」の後継として、麦あと地域を中心とし、普通植え地域への導入を基本とする。本県初の高温への適応性を有する品種として、高温障害対策を目的とした活用も期待される。平成24年は、約7haの実証ほを設置した。平成25年は、約100haの大規模実証ほを設置する計画である。

表1 奨励品種決定調査成績(水田研)

栽培条件	品種名	出穂期	成熟期	倒伏程度	稈長 cm	穂長 cm	穂数本/m <sup>2</sup>	精玄米重 kg/a	同左比率 %	千粒重 g	玄米タンパク質%	白米アミロース%	穀粒判別器		味度値
													整粒%	白未熟粒%	
稚苗 早植	彩のきずな	7.30	9.11	0.0	73	21.6	422	54.1	110	21.6	7.5	15.8	69.4	10.6	71
	コシヒカリ	8.2	9.8	0.7	91	20.3	414	50.8	104	20.0	7.1	16.1	56.1	16.4	68
	キヌヒカリ	8.1	9.9	0.0	83	18.3	365	49.0	100	19.9	7.5	16.3	46.0	18.8	70
中苗 普通	彩のきずな	8.15	9.29	0.0	77	22.3	415	54.0	109	22.1	8.2	16.8	80.4	4.2	75
	キヌヒカリ	8.17	9.30	0.3	86	18.0	354	49.7	100	20.1	8.2	17.3	57.5	10.2	75

注) 早植は平19～23、普通栽培は平20～23の平均値、移植期は早植5月12～13日、普通6月22～23日、玄米タンパク質含量は乾物換算

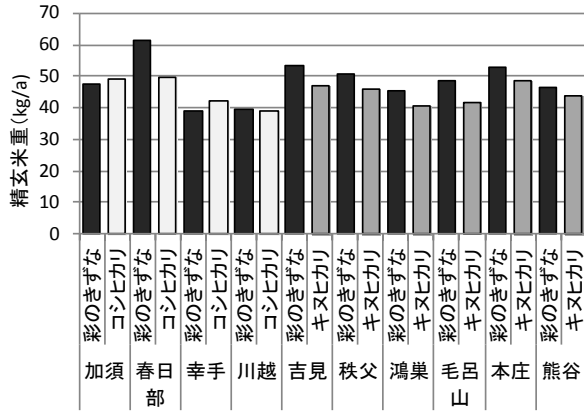


図2 奨励品種決定現地調査結果(収量)

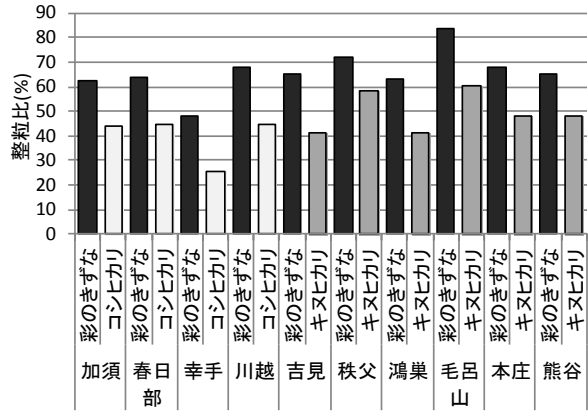


図3 奨励品種決定現地調査結果(玄米品質)

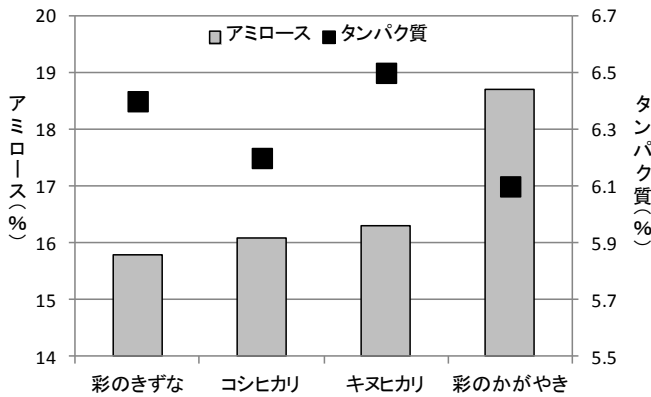


図4 白米の理化学成分

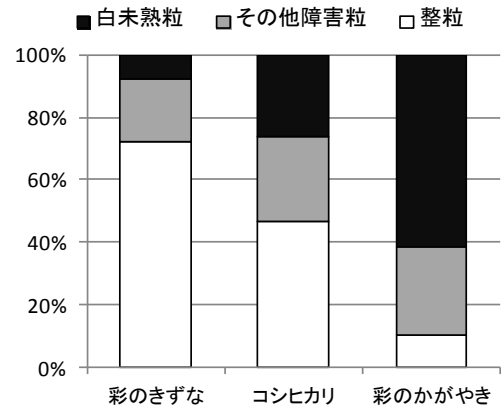


図5 平成24年産(高温年)の玄米品質



写真1 平成24年産玄米(左:彩のきずな、右:コシヒカリ)